

第31回 福島県建築文化賞 各作品賞 講評

正賞(1作品)

猪苗代のギャラリー(猪苗代町)

酒造作業蔵として1889年に竣工したこの蔵は、上棟時に磐梯山の噴火に見舞われ、東日本大震災で再び半壊という2度の被災を経験している。設計者は取り壊しの危機に瀕した建築に、それが蔵する歴史的・技術的価値を見出し、景観を生かした配置と新たな空間の創造、素材の吟味等により、「再生」というより「蘇生」という表現が相応しい建築・空間として結実させている。

骨組みだけになった蔵には建設当時に携わった職人の名が墨書された棟書きが現れていた。それを意匠に生かしながら記録として内部に巧みに取り込み、また、亀ヶ城にあった樫の巨木を使った大径の梁などからも、歴史の重みを感じさせられる。

施主との協同、価値観の共有も含めて、時間を経た建築に対する設計者の思い、材料や技術に対する尊敬の念、それを生かそうと工夫を重ねる姿勢は高く評価できる。建物と対話しながら、またとは入手困難な資材を蘇らせ、現代的手法で新たな生命を吹き込んでいく。落ち着いた住宅地の中に、百年の時を超えて再建された土蔵がもたらす異空間は、極めて上質で文化的な輝きを放つものである。

準賞(1作品)

会津坂下町立坂下東幼稚園(会津坂下町)

小学校と隣接する広々とした立地環境にあって、木造平屋で威圧感のない親しみやすい外観デザインであり、園庭には豊かな子供の活動空間が広がる。小学校と広場は園舎をまたぐブリッジを介して結ばれ、町の子供たちが育つ拠点となっている。

建物内部には、先人が植え育てた学校林から伐採した丸太がそのまま柱に用いられ、枝のように梁を支える方杖とともに、構造美が感じられる。

遊戯室は天井の梁の繰り返しが印象的で、その大きな架構と遊戯室を囲む子供のスケールに合った多様な小さな空間を対比的に共存させており、構造材であるとともに仕上材ともなる木の表情が豊かで、木材の生命力にあふれている。

米ぬか袋で床を磨く子供たちには、先人からの贈り物である木で造られた園舎を大切に使用していこうとする意識が育っているという。木のもつ力を大事にかつ効果的に使った力作である。

優秀賞(3作品)

○ 認定こども園 ぼだい樹西こども園 西保育園(白河市)

お寺の山から伐り出した16本の杉丸太が園の中心にある円形の遊戯ホールを囲み子供たちの成長を見守っている。その円形空間の架構は森を想像させ、また丁寧に施工された印象的な寄せ木の床からは、職人の工夫と仕事への誇りが感じられる。

エントランスへのアプローチ、それに面する職員室、受け止める位置にある子育て支援室の配置は安全の確保と保護者との関わりが大事な子供の施設として巧みであり、U字形に中庭を囲む木造の建物のやさしさとスケール感が、子供たちに豊かな活動環境を創り出している。設計者も施工者も愛情を込めて造ったという雰囲気は溢れている。

○ 尾瀬書美術館「思郷館」(檜枝岐村)

書家丹治思郷氏の作品を展示する個人美術館である。尾瀬の豊かな緑や水のせせらぎが感じられるミニ尾瀬公園の一角にあって、恵まれた自然環境に馴染んだシンプルな外観と鋭角で印象的なエントランスの外観を持ち合わせている。特に雄大な尾瀬の山並みを借景に、背面の木立と前面の小さく縦に落ちる水の線に対する、横に伸びる板貼りの外観のコントラストが美しい。

内部空間もシンプルで清々しく、若い建築家の心意気を感じられて心地よい建築となっている。

○ いわき芸術文化交流館アリオス(いわき市)

いわき市待望の総合芸術文化活動・市民交流の拠点であり、民間施設も複合し、広く市民が集まり、自由に過ごすことのできる「広場」となっている。前面に広がる公園に面する4層のバルコニーは、建物のファサードに特徴を持たせるとともに開放感と一体感を与えている。

機能性と音響効果に優れた大・中・小のホールを設け、市民の多様な文化交流活動に対応し、高い稼働率からは企画・運営体制づくりが十分に行われていることがうかがえ、この種の建築の計画として総合的な観点から高く評価できる。

東日本大震災の際には多くの避難者を受け容れたことも特筆できる。

特別部門賞(2作品)

○ 地形舞台－中山間過疎地域に寄り添う集落づくり拠点－(天栄村)

築100年を超える、空き家となっていた茅葺きの古民家を再生し、減築することで外部に地形と一体となった舞台を創り出して、建物内の土間や囲炉裏の空間と繋げ、心地よい空間を構成している。

建物の記憶をたどりながら再生し、手を極力加えることなく新たな用途を見出し、地域の文化の継承を図るとともに、観光客を迎えたイベントや集落の人々の日常的な集いの場として積極的に利用される場を生み出すことにより、集落の活性化を促そうとしている。

茅葺技術の保存継承、温泉街の街並み再生、人々の精神的拠点づくりなど、今後の幅広い地域おこしの起点とし、併せてここを活動拠点とする NPO を立ち上げていることは極めて意義深い試みとして評価でき、今後の着実な発展が期待される。

○ 檜枝岐歌舞伎伝承館 千葉之家(檜枝岐村)

国指定重要有形民俗文化財である歌舞伎の舞台と近接し、由緒ある周辺環境にあって、さりげない佇まいで自然に納まっているのが印象的である。

歌舞伎の展示・楽屋・集会機能を持ち、地場産材と地元の大工技術を積極的に取り入れ、地域文化の特色を存分に演出している。

伝統的な茅葺き屋根を模したむくりのある屋根は、建築に微かな柔らかさを与え、骨太の木造真壁造と相まって、周囲の歴史的要素の中に独特の存在感を醸し出している。

復興賞(3作品)

○ 福島トヨタ自動車株式会社 本社(福島市)

地域と共にある企業として地域に貢献し、復興の一翼を担うという企業理念の下、東日本大震災により被災した社屋の再建にあたって、地域の避難施設としても使用できるようにすることをコンセプトとし、備蓄倉庫の設置やエネルギー途絶時の対応などを実現していることは大きく評価できる。

民間企業が、地域を守り、育てるという意識を持って建築に臨んだことには大きな社会的意義が認められる。

○ 浪江 in 福島ライブラリー きぼう (福島市)

浪江町の応急仮設住宅で暮らす避難住民や地域住民のための仮設図書館である。シンプルな木質空間は開放感と親密性に富み、避難住民の生活に潤いを与え、利用者のコミュニティを育む温かな空間を実現している。

県産材で開発した「木製パネル」を用い、移築・再利用可能な新しい工法を採用しており、機能と工法の両面において、復興を願うシンボリックな建物となっている。

○ 相馬井戸端長屋(馬場野地区災害公営住宅建設工事)(相馬市)

災害公営住宅の建設にいち早く取り組み、ケアが必要な高齢者への対応を最優先に考え、高齢者同士の共助や市とボランティア・団体との協働を視野に入れて計画され、応急仮設住宅等からの円滑な移行を実現させている。

井戸端、長屋というネーミングからも、助け合い、支えあう場としたいという施主の思いが感じられる。災害公営住宅に共用の厨房、食堂、浴室、ボランティアルームを併設した事例は少なく、今後の被災者の住まいを考える上で好例となろう。

(※優秀賞、特別部門賞、復興賞については順不同)